

日本ハンセン病社会事業史研究 (第1報)

－1922年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討－

平田 勝政*

A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan (1)

Katsumasa HIRATA

1. 研究の目的と方法

何故日本のハンセン病患者は、国際動向から乖離して90年の長きにわたり隔離を強制され続けたのか、その真相究明作業はこの間貴重な研究成果を生み出してきたが、日本はどこで道を間違えたのか、その分岐点と原因に関する解明は未だ十分とはいえない。

本研究は、日本のハンセン病政策とその社会事業のあり方に決定的な相違をもたらす隔離監禁主義と治療解放主義に注目して、この2つの考え方の成立・展開と相克の過程を未解明な1920年代に重点を置いて解明しようとする一連の研究の第1報である。すでに筆者は、本研究を着想する基礎作業として、1920年代の台湾(旧日本植民地)におけるハンセン病問題の動向を手がかりに上記2つの考え方の存在と相克の過程について一定の解明をおこなった¹⁾。その成果を受けて、本研究では、『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』(2005年)が「乖離の出発点」と位置づけた第3回国際らい会議(1923年)に注目しつつも、さらに先立つ1920～22年の時期に治療解放主義の国際的普及に大きな役割を果たしたハワイ大学総長で化学者のアーサー・エル・ディーン博士に着眼して、その来日と影響への対応の中に「乖離」が胚胎していたことを解明しようとするものである。

本研究が注目するディーン博士の来日の事実とその影響については、治療解放主義を排除して強制隔離主義のハンセン病政策が長期間日本を支配してきたため、上記『検証会議最終報告書』の「年表」でさえ1922年のディーン博士来日について何ら記載がないことに象徴されるように、その重要性が気づかれることなくほとんど無視されるか、たとえ記述があっても事実確認がきわめて曖昧なまま今日に至っている²⁾。

そのような現状をふまえて、本研究では、まずもって事実経過の正確な把握を重視し、主に新聞や医学雑誌掲載の記事・講演記録等を分析対象にして、①1920年代初頭(来日以前の時期)におけるディーン氏の新薬による「治癒」成果の世界的波紋の日本への影響とそれをめぐる議論を検討し、②次に洪澤栄一の私費をもって招聘され来日したその滞在期間(1922.10.20から約1ヶ月)における各地での講演・視察・研究交流等の具体的活動内容を整理・検討して、日本のハンセン病社会事業を担う医療福祉関係者への影響を解明していく。なお本研究では、すでに上記の引用にもあるように、人権尊重の見地からすると不適切な用語が使用されているが、以下の本文でも歴史用語として原文のまま使用(引用)することをお断りしておく。

* 人間発達講座

2. 来日前におけるディーン博士のハンセン病治療法の日本への影響

ディーン博士開発の新薬（大楓子油エチルエステル製剤）による「癩治療法」に関する情報（来日前）の日本への紹介・報道、来日中の講演活動とその影響（1922年未まで）に関する資料を、当時の新聞や医学雑誌等から収集・目録化したのが末尾の〈資料1〉である³⁾。

以下、来日以前（1920.1～1922.9）と来日以後（1922.10～12）に大別して各期を概括していく。

(1) 来日前におけるディーン博士に関する報道・紹介

ディーン博士来日前の1920年代初頭（1920.1～1922.9）の動向を概観すると、1921年7月を境に、内務省衛生局（光田健輔主導）による隔離政策の推進の動きが顕著な前半期とディーン博士らのハワイにおけるハンセン病新治療と隔離政策の転換の動向が盛んに報じられる後半期、に分けて捉えることができる。

前半期は、保健衛生調査会（1916年6月設置）の第四部会の取り組みの結果が1920年9月に「根本的癩予防策要項」として確立し、内務省衛生局の「癩」関係刊行物も1920年前後から1921年初頭にかけて集中的に公刊（資料1－No.①～⑧）されるなど、隔離政策を強化するという方向性が明確化した時期にあたる。まさにその時期にハワイ（やがて世界）のハンセン病治療と隔離政策のあり方に変革をもたらしたディーン博士の新薬による「治癩」成果の日本への紹介が始まるのである。目下確認できる最初の紹介は、1920年11月の坂口勇の「癩病最新療法」（資料1－No.1）である。また逸早く京都帝国大学医学部皮膚科教室の伊藤斯郎がハワイに立ち寄りその新治療法を学び日本へ導入し、日本で初めてその新薬による治療を開始したのが第四区大島療養所の小林和二郎所長であるとも報じられている（No.3より）。

このように1920年から影響が散見されるが、紹介記事や報道が盛んになるのは、後半期の1921年7月以降で、医事雑誌では藤原多々志氏の論評（No.5～7）からである。特に1921年10～12月にかけて公表された豊島豊次郎（京都帝国大学医学部）の論文「布哇に於ける癩病治療法」（No.10,13）、「布哇に於ける癩病の治療成績に就て」（No.15）、「癩の新研究」（No.18～20）が最もまとまった情報を日本に提供している。

内務省衛生局も関心の高まりを受けて、ディーン博士らの研究論文を翻訳して『癩病治療法』（全40頁）を1921年9月（No.⑨）に発行し、同10月に各地の地方庁や関係各方面に配布している（No.12より）。同書には、①マクドナルドとディーンの研究論文「癩病治療法：特にチョールムーグラ油誘導薬による治療法」（J.T.McDonald and A.L.Dean, “The Treatment of Leprosy with especial reference to some new Chaulmoogra Oil Derivatives,” Public Health Reports, V.35, 1920）、②マクドナルドの論文「チョールムーグラ油（大楓子油）の「ディーン」誘導薬による癩病治療法」（J.T.McDonald, “Treatment of Leprosy with the Dean Derivatives of Chaulmoogra Oil,” Journal of American Medical Association, V.75, 1920）、の2編が翻訳・収録されている。その翻訳文中には、「癩病は不治の病に非ず」「癩病は全治するものなり」との確信が表明されている。また中央社会事業協会の機関誌「社会事業」第5巻第8号（1921年11月）も「米国に於ける癩患者」と題する記事で、ハワイでは「全患者の約二十五パーセントが全治者として解放」されていると紹介している。

(2) ディーン博士開発の大風子油エチール・エステル製剤をめぐる議論の展開

1922年に入ると、「日本之医界」誌が「布哇より出でたる新癩療法の価値」と題して、河村正之（第五区九州療養所長）と光田健輔（第一区全生病院長）の見解を連載し、ディーン博士の新製剤の評価をめぐる議論が開始される。河村（No. 21）は、すでに熊本県医師会学術部会（1921.12.4開催）で意見（No. 25参照）を述べているが、その一部である「大風子油及其製剤療法」の部分を「日本之医界」誌に寄稿している。結局、河村は、「1918年以來1921年に至る三カ年間に58.9%の解放患者を出し非常なる好成績を挙げた」というのは「頗る疑問多く吾人は悉とく全治なりとは信じ難し」と述べ、「疾病の全治」という判断基準がむしろ「社会公衆衛生を脅威する懼れなきや如何」＝「伝染性の如何」という標準によって解放退院させている点に「全治」の捉え方に相違があること、同時に再発の危険性の存在もあることを懸念している。また、この基準によれば、解放退院者は「吾人の療養所に於ても多々あり得べし」としている。最後に、河村は、「ディーン氏大風子油誘導体は実験日未だ浅く俄に効果を判定し難きも該油を改良し吸収を容易ならしめ、永時注射に耐へしめ得るの利あれば大風子油の有効能率を益々發揮せしむるならん」と期待を寄せている。

一方の光田（No. 22）は、古来より用いられてきた「単純大風子油」を13年前から注射して「頗る良好なる成績を挙げ居るものなり」とし、ディーン博士の「大風子油酸エチールエステル剤」よりも「寧ろ単純なる大風子油注射を可とするものなり」と結論している。さらにディーン博士の新薬は「甚だ高価」であり、それで「癩の如き頑固なる疾患」が「容易に治癒するものなりとは考へ得べからざるなり」と疑問を呈している。そして「布哇政庁が多年取り来る絶対的離隔政策を擲って、区々たる治療政策を採り、その輕快者を解放したりとせよ、然らば今後十年を待たずして、更に尚ほ多数の癩患者を発生するに至るべし。」と批判をしている。なお、ハワイの基準に従えば、河村と同様、光田も「本邦に於ける療養所にありても、約半数の患者を解放することを得べし」としているが、もしそれを実行したならば結果として、「再び救ふべからざる重症に陥り、入院を要求するに至るべし。」とも指摘している。光田にあつては、ディーン氏の新治療法はほとんど無意味に等しいという評価を下しているといえる。その批判は、1922年4月開催（於・京大）の第6回日本医学会第12分科会（第22回日本皮膚科学会総会）での討論においても展開されている。

第22回皮膚科学会総会では、小林大島療養所長、本間富之介（九大皮膚科）、米田徳次郎らが下記の題目でディーン氏製剤に影響された最新の「癩治療法」の効験を発表した。なお伊藤斯郎（京大皮膚科）は、別途「医事新聞」（No. 28）に見解を発表した。

- ① 小林和三郎：大風子油の新製剤を以てせる癩の治療成績（No. 30, 33）
- ② 本間富之助：癩に対するギノカリンの治験（No. 31, 34）
- ③ 米田徳次郎：癩の最新療法に就て（No. 32, 35）

討論には、伊藤斯郎、上川豊（九州療養所）、伊藤實（東大皮膚科）、光田健輔（全生病院）、土肥慶蔵（東大皮膚科）、青木大勇（長崎医専、長崎皮膚科病院）らが参加し、発表後の討議の中で、光田は、「布哇ディーン氏一度療法に就て発表するや、日本の学界は付和雷同（し）…又布哇の報告以來種々の薬剤は、雨後の筍の如く多数に販売せらるるに至れるは、慨嘆に堪へず。抑も癩の研究は、少くも二十年間の日数を要す。然るに僅々一、

二年の実験にて、何葉が効験ありなど大唱するは、軽率というべし。」(No. 31,34)と苦言を呈した。土肥慶蔵は、「新剤に就ては、充分周到なる実験を要するも、大楓子油酸は大楓子油に勝るものたることは疑ふ余地なかるべし」との見解を示し、青木大勇も、「新剤の効果は在来のものより進歩せるものと断言するに吝かならず」と述べて一定の評価を下し、光田とは一線を画していた。

以上の概観に見るように、ディーン博士来日以前における議論の特徴としては、①「全治」観の基準の相違を反映して大楓子油酸エチルエステル剤に対する特効性については強い疑問が出されているが、河村・土肥・青木らの一定肯定派と光田に代表される否定派の2つが見解の相違として形成されていること、②その後の日本のハンセン病政策に大きな影響を及ぼした光田の上記見解の中に国際動向からの「乖離」がすでに示されていること、が確認できる。このような対立関係が形成されている中で、ディーン博士が来日するのである。

3. ディーン博士の来日とその講演活動

(1) ディーン博士の略歴と来日中の活動

1922年10月20日に横浜港に到着したディーン博士の約1ヶ月余の滞在期間中の視察・講演活動等を<資料1>の関係記事から整理したのが表1である。

まずディーン博士の来日は、渋澤栄一らが組織する「日米関係委員会」⁴⁾の招待に応じたもので、ディーン氏の略歴については、次のように紹介された。

「ハーバード大学卒業後、更に生理学専攻の目的を以てエール大学院に入学し、1902年卒業後数年間は同大学助教授を奉職した後、大正3年布哇大学総長に招ぜられ目下その現職にあるが、氏は温厚篤実の学者なると同時に博識の教育家として声名がある。近来氏は、布哇大学に於て特に日本文化史の講堂を設けて前同志社大学総長原田助氏を招き之が教授に当らしめて鋭意日米間意思の疎通、相互知識の啓発に尽瘁しつつある外、氏は近時癩病診療剤の学理的研究を続け遂に大風子油中より同病に特効ある葉剤を発見し幾多の癩病患者を全治せしめている事世界的発見として学界に有名である。」(No. 56)

次に、来日中の活動を概観すると、慶応義塾大学での講演(10.24)を皮切りに、仙台入りして東北帝国大学等の視察(10.28)、渋澤栄一らの案内による全生病院の視察と講演(11.3)、東京帝国大学医学部における講演会と歓迎会(11.5)、京都帝国大学医学部における講演会と歓迎会(11.9)、九州帝国大学等の視察(11.14)、京都市内の小学校における講演(11.20)などの主要日程をこなし、11月下旬に帰米した。

来日中に日本のハンセン病医療・福祉関係者との人的交流(接点)が確認できるのは、全生病院での案内役の渋澤栄一と光田健輔、東大講演・歓迎会での土肥慶蔵、京大講演・歓迎会での豊島豊次郎・小林和二郎、九大視察時での本間富之助と樂生病院の竹内勅らである。

(2) ディーン博士の講演内容の紹介とその特徴

来日中の講演活動には、①ハンセン病の治療法とその政策に関するもの、②日米親善を目的とした日米関係の諸問題に関するもの(No. 70～72)、の2つがある。以下では、目下確認できる4つのハンセン病関係の講演内容を紹介・検討する。

表1 ハワイ大学総長ディーン博士の来日とその活動一覧

年 月 日	活 動 内 容
1922.10.10 (火)	ホノルルを出港（プレジデント・ピーヤス号）→横浜へ向かう
" 10.20 (金)	横浜に入港→帝国ホテル（東京）に滞在
" 10.21 (土)	
" 10.22 (日)	
" 10.23 (月)	
" 10.24 (火)	午後1時より慶応義塾大学東講舎講堂にて講演～2時半閉会 →講演記録は、「医事公論」第541号(1922.11.4)、「日本医事新報」第64号(1922.11.5)に掲載
" 10.25 (水)	
" 10.26 (木)	
" 10.27 (金)	仙台へ移動
" 10.28 (土)	仙台入り、山本有成ドクトルの案内で、東北帝国大学の理・工・医の各学部を視察
" 10.29 (日)	東北学院シュネーダー氏夫妻の案内で松島を遊覧→夜行にて東京へ
" 10.30 (月)	
" 10.31 (火)	
1922.11. 1 (水)	
" 11. 2 (木)	
" 11. 3 (金)	午前10時、ディーン氏、澁澤栄一子爵、三宅驥博士、石津利作博士（保健衛生調査会委員）、古見嘉一・(刈米達夫?) 内務省技師らとともに全生病院を視察し、講演する。
" 11. 4 (土)	「医事公論」第541号、ディーン氏の慶応大での講演を「米国に於ける癩療法とその制度」と題して掲載
" 11. 5 (日)	「日本医事新報」第64号、ディーン氏の慶応大での講演を「癩の治療法に就て」（慶応大学医学部草間良男訳）と題して掲載
" 11. 6 (月)	午後4時より東京医学会主催で東京帝国大学医学部生理医化学教室講堂においてディーン氏の講演会を開催（聴衆百余名、東京医学会会頭の呉秀三による紹介の後、1時間余の癩治療法に関する講演を杉田直樹が意識、午後5時半閉会）、閉会後に皮膚科教室にて癩の模型標本等を一覽。午後6時半より東京医学会・日本皮膚科学会・医事雑誌協会の合同主催で歓迎晩餐会を東大構内山上御殿にて開催（出席者60余名、歓迎挨拶：土肥慶蔵、通訳：姉崎正治文学博士）。※姉崎は、日米関係委員会のメンバーである。
" 11. 7 (火)	京都へ移動
" 11. 8 (水)	午前7時半京都に到着。午後、同志社大学にて講演（演題：布哇に於ける日本人問題）
" 11. 9 (木)	午後3時より京都帝国大学医学部解剖学教室講堂において「癩病治療薬大楓子油二就テ」と題して講演（通訳：中瀬古六郎）。講演終了後、京都ホテルにて歓迎会開催（出席者：藤浪鑑、足立、平井、島園、戸田、松本、豊島、中西、松浦有志太郎、賀屋、小川瑤五郎、望月の各博士、菅野弘一、藤野幸太郎、西村千吉、水越重助、中村正勁、桜井喜吉、三上繁、中野忠一郎、木村三郎、太田利賢三、松田道作、坂部秀夫、遠藤中節、中瀬古六郎、斎藤大雅、正谷與三七、小林和三郎）→講演記録は、「癩治療薬大楓子油二就テ」と題して「京都医学雑誌」第19巻第12号(1922.12)に掲載
" 11.10 (金)	京都帝国大学にて講演（演題：米国の国民的理想）
" 11.11 (土)	京都を出発、福岡へ移動
" 11.12 (日)	
" 11.13 (月)	午後6時福岡（博多）に到着、栄屋旅館に投宿（2泊）
" 11.14 (火)	午前10時より九州帝国大学医学部皮膚科を訪問し、「大楓子酸エッチ・エル・エステル注射実験」をおこなう。板垣・石阪両教授と高木助教授の説明を聴取。高木助教授・本間助手とエチルエステルに関し意見交換。午後から工学部・農学部を見学し、その後、市内千代町の竹内氏の衆生病院を視察する。
" 11.15 (水)	久留米を経て熊本（回春病院）へ行く予定を急遽変更して、久留米から戸畑に引き返し、男爵・安川敬一郎氏を尋ね、明治専門学校を視察して安川邸に宿泊。熊本では、熊本市医師会と熊本医大の合同で講演会開催を企画していたが立ち消えとなった。
" 11.16 (木)	福岡（安川邸）を出発し、別府へ移動・入湯
" 11.17 (金)	別府より海路で神戸・大阪、そして奈良へ（17～20日）
" 11.18 (土)	
" 11.19 (日)	
" 11.20 (月)	
" 11.21 (火)	再び京都入り
" 11.22 (水)	午後3時より京都市立生祥小学校において京都市教育会主催によるディーン氏の講演会を開催（演題：米国の教育の特長と布哇の日本学童問題、通訳：畠中氏）→講演記録は京日出新聞（11.25～27）に掲載
" 11.23 (木)	横浜港より帰国？（30日帰国という報道もある）

- (1) 来日最初の講演である慶応義塾大学（1922.10.24）での講演の邦訳（No. 51,52,53）では、次のように述べている。

「癩病が『ハワイ』島へ輸入されたのは、今から約百年前、当時は支那人の移民が盛であったが、癩病はこれ等支那人が輸入したもので、土人は一名支那人病と称したものである。輸入当初は自然的免疫の幸を持たない土人は、癩病の為に非常な惨害を受けたもので、人口の大多数が死滅した。当時の政府は、これが予防撲滅の一策として、癩病患者をハワイ群島の一小島『モロカイ』へ隔離したが、現今なれば人権蹂躪の嘲りをまぬかれない程度の強制執行を取ったのである。」「自由を拘束され、社会から隔離せられるので、今日までは、癩患者は逃げ隠れて、容易に収容所や隔離所に入れることが出来なかったが、今日ではこの治療法と制度とが出来てからは患者は進んで治療を受けに来る。我々の造ったエチールエステルが最良の癩治療剤であるとは云へない。まだまだ幾多の研究を経、幾多の改良を加へて、理想的の薬を製造せねばならぬと吾々は苦心している。」（No. 51,52,53 を適宜合成）

- (2) 次に、全生病院での講演（1922.11.3）は、その要旨が次のように記録されている。「元来レプラはずっと古くからある病気で一名を天刑病と云い又不治の病として各国の記録があるのであります。然るに今日科学と医学の進歩に依って必ず全治しないとも限らず、きっと全治すべきものであると思います。

故に院長さん（＝光田健輔、引用者注）始め日本医学者が熱心なる研究に依る事と思います。総て人類の間に起る色々な難関は神が人々の力を試す為であるから我々人類は飽迄其難関に打ち勝ちて必ず其解決を見つけなければなりません。又必ず解決のつくべきものと信じます。でありますから皆様は院長さん始め職員の方々の仰せに従って体を大切にしておいで下さい。米国合衆国の人々は一億余であります。其中に「レプラ」は僅一千名ばかりしか居りません。私は布哇に来て初めて患者を見た様な有様であります。それで日本にも近き将来に又近き未来に於て必ず「レプラ」と云ふものを見る事が出来ない様になるであろうと確信しております。又私が日本に来て間違った話を二つ程聞きました。それは、「レプラ」に罹ると本人も家族も恥辱と思ひ、又社会もそう思ひつつあるのが大なる間違いであります。病気に罹った人々は其れは非常に不幸ではありますが、けれ共決して恥辱ではありません。法律を犯した罪人でも何でもなく貴郎方は立派な日本国民であります。

恥辱と不幸とは全く別問題であります。それでこの病は不治ではない故、真実の望を以て体を大切にしていって貰いたい。」（No. 54）

- (3) 東京帝国大学での講演（1922.11.6）では、次のように述べている。

「日本では幸、全生病院を参観する機会を得ましたが、私は日本語が話せないのでその間の消息を十分詳にすることはできませんが、患者に羞恥と絶望の色が漲ぎって居るのを注意せずには居られませんでした。日本では特に家門の恥辱として非常に嫌忌されて居る由であります。第一この感情を患者及び社会から除去することが将来治療上大切なることあります。更に又癩病の治療はその種の病院のみに任せず大学その他の研究所も協力して研究に従事したならば将来貢献する所多大なるものがあろうと思はれます。」（No. 66）

- (4) 京都帝国大学での講演（1922.11.9）では、次のように述べている。

「次に恢復せる患者の処置に関する法律に付今少し申し述べたいと存じます。カリヒ病院長ハッセルタイン氏は毎週一回づつ三ヶ月間継続診断したる上充分治療を完ふせるものと認めたるものを政府の衛生局に報告しますと政府の任命した3名の医師が更に之を試験し又始終写真を撮り又局部の細菌学的検査をなし細菌が居るか居らぬかを確かめ愈他に感染の憂なきを認めたる上で放免するのであります。而して放免した患者は一週間に一度一ケ年間カリヒ収容所に診察を受け再発しない時は一般の人となるのであります。但し遠隔せる島に放免せられたるものは一ヶ月一回来て診察を受くる事に成ります。

そこで一昨年六月以来昔の如くモロカイの植民地に患者を送らない事に成りまして只今残って居るものは最早四百人乃至五百人であります。是れも遂には絶無となるのであります。只今カリヒの病院には二百人位収容されて居ります。

全体患者を本島より四十哩も隔てたる他と全く交通なき孤島の癩病植民地に送ると云ふ事は一面人道の上から見ても又一面精神的治療の上から云ふても頗る考ふべき事であったのであります。よし植民地は色々の設備が完全に出来上がって居りましても最愛の父母妻子互に相分れ病癒えざれば終に相見る能はざるの境遇に入るに至っては精神上の打撃は誠に大なるものがあるのであります。況んや天刑病として普通人全く交りを絶たざるべからざるに於ては人道上の大問題であるのであります。(中略)

近時癩病の治療が容易になり以前の如く天刑病と称すべきもなく治癒するものであると云ふ事に成った為に従来逃げ隠れして居った患者が自ら喜んでカリヒ病院に來り進んで治療を受ける様になり、周囲の人も毫も癩患者を排斥しない様になってきました。従って極めて初期に治療を受けますから傷の大ならざる内に全癒するに至ったのであります。」(No. 67, 74)

以上が講演記録の中で注目すべき部分の紹介である。ハワイでの経験と成果をふまえてディーン博士が日本での講演で伝えたかった要点の第一は、科学と医学の進歩（化学療法）によって「癩病」が不治の病から全治する可能性を有する病気となってきたということ、第二に、その可能性を切り拓いていくためには大学（研究機関）と療養所（治療機関）とが連携・協同して英知を結集し科学的治療法の研究を発展させること、第三に、人権尊重と人道上の観点から強制隔離政策は見直されるべきで、慎重な手続きを経て、他者への感染の可能性がない限りは解放して「一般の人」として通常の生活が営めるように政策を転換すべきこと、などであった。特に全生病院視察後の東大での講演で日本の患者には「羞恥と絶望の色が漲ぎって居る」ことを察知し、その「羞恥と絶望」の背後にあるものを取り除いていく努力の必要を提起している点は傾聴に値する重要な指摘であった。

4. 今後の課題

本研究は、これまでほとんど無視されてきたディーン博士来日の事実関係とその影響について一定の解明をおこない、1922年の時点で世界の動向からの「乖離」がすでに示されていたことを明らかにした。ディーン博士が来日して日米親善の一環として日本のハンセン病問題の解決のために提起した諸課題を、直接・間接に影響を受けた日本の関係者（治

療解放主義者)は、1923年以降それをどう受けとめ、継承・発展させていったのか、逆に隔離監禁主義者はどう軽視・無視・否定して世界の動向に逆行していったのか、その点をさらに追究していきたい。そのためには今後の課題として、①ディーン博士(その生涯・思想)とハワイのハンセン病問題との関係、②ディーン博士による新葉の世界的波紋と第3回国際らい会議(1923年)への影響の解明、③渋澤栄一とハンセン病問題との関係の解明、④1920年代の「癩療養所」所長会議における隔離主義と治療主義の相克の解明、⑤1920年代における日本MTLの成立とその役割の検討、⑥ディーン博士をはじめ国際的な治療解放主義の影響を受けた日本人関係者(青木大勇ら)のとりくみの解明、などが必要である。

<註>

- 1) 平田：1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究「長崎大学教育学部紀要－教育科学－」第72号,13～20頁,2008年3月。なお、この論文は、修正加筆して「研究論文集－教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集－」第2巻第2号(<http://hdl.handle.net/10069/21346>)に掲載されている。今後はこちらを参照されたい。
- 2) ディーン博士来日については、『検証会議最終報告書』以外に、代表的な歴史研究文献である山本俊一著『日本らい史』(1993年)や藤野豊著『「いのち」の近代史』(2001年)、さらに代表的資料館の『高松宮記念ハンセン病資料館10周年記念誌』(2004年)の「年表」でも記述されていない。来日の事実を記述した刊行物としては、①藤楓協会編『光田健輔と日本のらい予防事業』(1958年)、②『菊池恵楓園50年史』(1960年)、③多摩全生園患者自治会編『俱会一処』(一光社 1979年)、④国立療養所菊池楓園入所者自治会『壁をこえて－自治会八十年の軌跡－』(2006年)がある。上記①では、その「年表」(26頁)中に「デーン博士招聘。渋沢栄一は渡米した帰り、ハワイに立寄り、ハワイ大学長にして大楓子油にエチール・エステル調製により命名のあったデーン博士を我が国に私費をもって招聘し各地の大学、研究所において指導と講演を1ヶ月にわたって開いた。」と内容的には正確な記述をしているが、問題は月日不詳で「大正10年(1921)」中に記載されている点である。②の「年表」(221頁)も①を踏襲したためか来日が1921年で扱われている。来日は1922年であるから、①②ともに明らかに誤っている。③の「年表」(11頁)は、1922年の「11月」に「渋沢栄一子爵の案内でハワイ・ホノルル大学ディーン博士が来院…」と記し、来日の年月が正確になっている。④の「年表」(151頁)が、これまでの刊行物で最も正確であり、来日年月を1922年の「11月」と把握し、①の内容をより簡潔に記述している。しかし実際の来日は10月であるから、正確には「10～11月」である。このようにディーン博士来日に関する歴史的事実とその内容は、ほとんど未解明な状況である。
- 3) 〈資料1〉には、当時を反映して「大楓子」と「大風子」の両方の使用例が見られるため、原文のままを記述している。なお、本論文の見出しには「大風子」を用いた。
- 4) 山岡道男氏の論文「太平洋問題研究会における日米関係委員会」(早大社研「社会科学討究」第36巻第2号、1990年)によれば、日米関係委員会は、日米関係が、日露戦争を契機とする満州問題やその後の移民・排日問題等をめぐって対立の性格を強めていく状況を憂慮して、「日米両国の親善を永遠確保するため、常に両国民の情意を調和融合せしめ、時に紛議を生ずることあれば、之れが解決に努むることを目的」として、1916年2月に組織されたもので、「渋澤の私的な会合の要素が強かった」とされる。さらに山岡論文「太平洋会議に関する研究序説」(早大社研「社会

科学討究」第35巻第2号、1989年）によれば、米国側（ハワイ）にあつてディーン博士が原田助氏らとともに日米関係の悪化を懸念して相互理解の推進に尽力する中心的役割を担っていることを明らかにしている。渋澤は、ディーン博士の来日とその講演活動の一環に「癩治療法」の日本への紹介・普及を位置づけ、その交流を通して日米親善に良い影響を及ぼすことを期待して招聘したのではないかと推察される。今後の検証課題である。

（付記） 本研究は、日本社会福祉学会第56回大会（2008年10月12日 於・岡山県立大学）において発表した「1920年代のハンセン病問題と社会事業（第2報）ーディーン氏の来日とその治療解放主義の影響の検討ー」（『日本社会福祉学会第56回全国大会報告要旨集 CD-ROM』160頁所収）を改題し、修正・加筆してまとめたものであり、2008年度科学研究費補助金（課題番号20530507）による研究成果の一部である。

＜資料1＞

ハンセン病問題資料目録（ハワイ大学総長ディーン博士来日関係資料）

No.	著者名	資料名	号数	面	発行年月日
①	内務省衛生局	『保健衛生調査委員光田健輔沖繩県岡山県及台湾出復命書』 ※『近現代日本ハンセン病問題資料集成(戦前編)』第2巻 所収	内務省衛生局発行	全128頁	1918(T.7)－6
②	内務省衛生局	『米国癩患者ノ監護及処置法』 ※同補巻5 所収	内務省衛生局発行	全35頁	1919(T.8)－10
③	内務省衛生局	『保健衛生調査会第四部(癩) 議事速記録』 ※同(戦前編)2巻 所収	内務省衛生局発行	全87頁	1919(T.8)－12
④	内務省衛生局	『各地方ニ於ケル癩部落、癩集合地ニ関スル概況』 ※同上2巻 所収	内務省衛生局発行	全30頁	1920(T.9)－6
⑤	内務省衛生局	『各国ニ於ケル癩予防法規』 ※同上補巻5 所収	内務省衛生局発行	全50頁	1920(T.9)－8
1	坂口 勇 (順天堂病院)	癩病最新療法	『大日本私立衛生会雑誌』第448号	322	1920(T.9)－11
⑥	内務省衛生局 (光田健輔述)	『癩予防に関する意見』 ※同上2巻 所収	内務省衛生局発行	全59頁	1921(T.10)－1
⑦	内務省衛生局	『癩予防ニ関スル件』 ※同上2巻 所収	内務省衛生局発行	全25頁	1921(T.10)－1
⑧	内務省衛生局	『癩患者統計』(大正八年三月)	内務省衛生局発行	全40頁	1921(T.10)－3
2		癩病は治療が出来る	『台湾日日新報』第7452号	4面	1921(T.10).3.5
3		大島癩療所の新注射液の光明、今迄ない積極療法(森岡香 川県衛生課長談) * 1920.4、ディーン氏新癩治療法発表→京都大学伊藤博士 が学んで新聞雑誌に発表	『東京朝日新聞』第12602号	2面	1921(T.10).7.11
4		日本初めての癩病注射曙光、大島療養所で試験中であつた 大楓子油、近く研究発表 *小林所長	『東京朝日新聞』第12638号	5面	1921(T.10).8.16
⑨	内務省衛生局 (訳)	『癩病治療法』 ※『近現代日本ハンセン病問題資料集成』には収録されて いない	内務省衛生局発行	全40頁	1921(T.10)－9
5	藤原 多々志	癩治療界に於ける新しき叫喚一類々と喧伝せらるる英米の 研究や如何にー	『日本医事新報』第23号	4-5	1921(T.10).9.15
6	藤原 多々志	ディーン氏製剤を評す(1)	『日本医事新報』第24号	3-4	1921(T.10).9.25
7	藤原 多々志	ディーン氏製剤を評す(2)	『日本医事新報』第25号	5-6	1921(T.10).10.5
8	安達 忠志	最近に見たる全生病院と癩離隔に関する雑感	『社会事業』第5巻第7号	25-44	1921(T.10)－10
*		(会報) 澁澤会長の渡米	『社会事業』第5巻第7号	661	1921(T.10)－10
9		布哇病院より発表せる天刑病者への福音、大楓子油の注射 により、三年に約六割を全治	『台湾日日新報』第7675号	7面	1921(T.10).10.14
10	豊島 豊次郎	布哇に於ける癩病治療法(1)	『医海時報』第1426号	1737-1739	1921(T.10).10.22
11	内務省衛生局 (訳)	癩病治療法(1)ー特にチョールムーグラ油誘導薬による治 療法ー	『医海時報』第1426号	1748	1921(T.10).10.22
12		『癩病治療法』を配布	『日本医事新報』第27号	17	1921(T.10).10.25
13	豊島 豊次郎	布哇に於ける癩病治療法(2)	『医海時報』第1427号	1778-1781	1921(T.10).10.29
14	内務省衛生局 (訳)	癩病治療法(2)ー特にチョールムーグラ油誘導薬による治 療法ー	『医海時報』第1427号	1792-1793	1921(T.10).10.29
15	豊島 豊次郎	布哇に於ける癩病の治療成績に就て	『日本微生物学会雑誌』第15巻第11号	827-844	1921(T.10)－11
16		(雑報・海外) 米国に於ける癩患者	『社会事業』第5巻第8号	76	1921(T.10)－11
17		ディーン氏の治癩製剤に就て	『日本医事新報』第32号	11	1921(T.10).12.15
18	豊島 豊次郎	癩の新研究(一)	『東京朝日新聞』第12764号	6面	1921(T.10).12.20
19	豊島 豊次郎	癩の新研究(二)	『東京朝日新聞』第12765号	6面	1921(T.10).12.21
20	豊島 豊次郎	癩の新研究(三)	『東京朝日新聞』第12766号	6面	1921(T.10).12.22

No.	著者名	資料名	号数	面	発行年月日
21	河村 正之	布哇より出でたる新癩療法の価値（其一）大風子油剤に就て	「日本之医界」第12巻第1号	10-12	1922(T.11).1
22	光田 健輔	布哇より出でたる新癩療法の価値（其二）治療上単純大風子油と大風子酸エチルエステル剤との優劣	「日本之医界」第12巻第4号	136	1922(T.11).1.28
23	豊島 豊次郎	癩病は大半治癒る	「大日本私立衛生会雑誌」第455号	387	1922(T.11) - 1
24	豊島 豊次郎	癩の新研究	「大日本私立衛生会雑誌」第456号	423-427	1922(T.11) - 2
*		(会報) 澁澤会長の帰朝	「社会事業」第5巻第11号	1095-1097	1922(T.11) - 2
25	河村 正之	近代癩治療ノ批判並ニ最近大風子油製剤ニ就テ	「鎮西医報」第195号	1-28	1922(T.11) - 3
26	光野 慶明	我国の癩政策に就て（上）	「東京朝日新聞」第12872号	2面	1922(T.11).4.7
27	光野 慶明	我国の癩政策に就て（下）	「東京朝日新聞」第12873号	2面	1922(T.11).4.8
28	伊藤 斯郎 (京都帝国大学医学部皮膚科教室)	癩病に対する大風子油エチルエステルの治験	「医事新聞」第1092号	485-492	1922(T.11).4.25
29	本間 留之助 (九州帝国大学医学部皮膚科教室)	癩に対するキノカリンの治療	「医事公論」第514号	5	1922(T.11).4.29
30	小林 和二郎 (大島療養所)	大風子油の新製剤を以てせる癩の治療成績	「皮膚科泌尿器科雑誌」第22巻第5号	454-455	1922(T.11) - 5
31	本間 富之助	癩に対するキノカリンの治療	「皮膚科泌尿器科雑誌」第22巻第5号	455-458	1922(T.11) - 5
32	米田 徳次郎	癩の最新療法に就て	「皮膚科泌尿器科雑誌」第22巻第5号	458-459	1922(T.11) - 5
33	小林 和二郎	大風子油の新製剤を以てせる癩の治療成績（第六回日本医学会第十二分科会演説） * 1922.4.1 ~ 4.5 開催（京都）	「医事公論」第520号	9	1922(T.11).6.10
34	本間 富之助	キノカリンの臨床治験（第六回日本医学会第十二分科会演説）	「医事公論」第520号	9	1922(T.11).6.10
35	米田 徳次郎	癩の最新療法に就て（第六回日本医学会第十二分科会演説）	「医事公論」第520号	9	1922(T.11).6.10
36	加来 天民	大風子油及大風子油脂肪酸エチルエステルの製法に就て * 1922.7.13 開催の朝鮮医学会京城支会での講演記録	「朝鮮医学会雑誌」第39号	252-261	1922(T.11)
37		布哇の癩病治療剤の名称、効力及び其用法と製法	「日本之医界」第12巻第30号	896	1922(T.11).8.5
38		キノカリンの内用的効力	「日本之医界」第12巻第30号	897	1922(T.11).8.5
39	本間 留三郎 (九州帝国大学医学部皮膚科教室)	癩の治療法に就て	「日本医事新報」第58号	6	1922(T.11).9.5
40		(雑報) エー・エル・ディーン氏の渡来	「東京医事新誌」第2301号	2096-2097	1922(T.11).10.21
41		癩病の恩人デ博士来朝した、癩患救済事業視察に滞在中三大学で講演	「時事新報」第14107号	11面	1922(T.11).10.21
42		癩病患者の恩人ライマー博士来る、昨日入港のピアス号で	「都新聞」第12504号	11面	1922(T.11).10.21
43		天刑病の恩人、ディン博士来朝、澁澤子等の招聘で、帝大で癩病の講演	「国民新聞」第11048号	3面	1922(T.11).10.22
44		デ博士慶大へ、医学部を視察	「時事新報」第14111号	6面	1922(T.11).10.24
45		(雑報) アーサー・エル・ディーン氏の来着	「東京医事新誌」第2302号	2144-2145	1922(T.11).10.28
46		癩研究に九州下り、姉崎博士の案内で乗気になったデ博士	「東京朝日新聞」第13079号	5面	1922(T.11).10.31
47		デー博士夫妻来仙、廿八日松島を遊覧	「河北新報」第9226号	3面	1922(T.11).10.31
48		布哇の癩博士が福岡癩生病院や熊本の回春病院を視察する	「福岡日日新聞」第14011号	2面	1922(T.11).11.1
49		回春病院でデ博士を待ちこがれる、効果著し癩病薬の注射、百人中七八人全治	「九州日日新聞」第12860号	4面	1922(T.11).11.2
50		(雑報) ディーン氏夫妻の松島遊覧	「東京医事新誌」第2303号	2198-2199	1922(T.11).11.4
51	アーサー・エル・ディーン	米国に於ける癩療法とその制度	「医事公論」第541号	14-15	1922(T.11).11.4

No.	著者名	資料名	号数	面	発行年月日
52	ディーン	大楓子油の効力に就て	「日本之医界」第12巻第42号	1239	1922(T.11).11.4
53	アーサー・エル・ディーン (草間良男訳)	癩の治療法に就て (慶応義塾大学に於ける講演)	「日本医事新報」第64号	6	1922(T.11).11.5
54		全生院患者一同：ディーン博士を迎ふ／瀧澤子爵の講演要旨／ディーン博士の講演要旨／瀧澤子爵追加	「山桜」第4巻第10号	1-6	1922(T.11).11.8
55		癩博士福岡に立寄る、竹内氏の癩生病院を視察の上、熊本に向ひ阿蘇にも登山	「福岡日日新聞」第14018号	7面	1922(T.11).11.8
56		布哇大学総長ディーン博士来る、癩病特効剤の世界的発見者	「京都日出新聞」第12802号(夕刊)	1面	1922(T.11).11.9
57		ディーン博士発見の謎の癩病薬、九大で近く実験	「福岡日日新聞」第14019号	2面	1922(T.11).11.9
58		(雑報) ディーン氏講演会及歓迎晩餐会	「東京医事新誌」第2304号	2236	1922(T.11).11.11
59		癩病博士福岡に来る、昨十三日午後六時博多駅で、九大医学部其他視察	「福岡日日新聞」第14024号	7面	1922(T.11).11.14
60		ディーン博士は日米委員会から招待した、姉崎博士語る	「福岡日日新聞」第14025号(夕刊)	1面	1922(T.11).11.15
61		癩病薬の発見者、デ博士の九州入り、久留米まで来て東京へ引返す	「九州日日新聞」第12873号	4面	1922(T.11).11.16
62		癩病博士熊本に来らず	「九州新聞」第5911号	5面	1922(T.11).11.17
63		(雑報) アーサー・エル・ディーン氏の西下	「東京医事新誌」第2305号	2299-2300	1922(T.11).11.18
64		デ博士講演会、二十二日生祥校にて	「京都日出新聞」第12812号(夕刊)	1面	1922(T.11).11.19
65	大橋 祐之助	癩病者の父、ヨセフ・ダミエン「ディーン博士を迎えて」	「京都日出新聞」第12813号(夕刊)	3面	1922(T.11).11.20
66	アーサー・エル・ディーン	癩病と大楓子油 * 1922.11.6、東京医学会主催の講演会の講演記録	「中外医事新報」第1024号	1355-1358	1922(T.11).11.20
67	アーサー・エル・ディーン	癩病治療薬大楓子油に就て * 1922.11.9、京都帝国大学医学部での講演記録	「京都医事衛生雑誌」第344号	1-4	1922(T.11).11.25
68		(会報) 布哇大学総長ディーン博士の講演と歓迎会	「京都医事衛生雑誌」第344号	17	1922(T.11).11.25
69		(雑報) アーサー・ディーン氏の九大参観	「東京医事新誌」第2306号	2357	1922(T.11).11.25
70	ディーン博士	米国教育の特長と布哇の日本学童問題 (上) * 11.22の生祥校(京都)での講演記録	「京都日出新聞」第12818号	2面	1922(T.11).11.25
71	ディーン博士	米国教育の特長と布哇の日本学童問題 (中)	「京都日出新聞」第12819号	2面	1922(T.11).11.26
72	ディーン博士	米国教育の特長と布哇の日本学童問題 (下)	「京都日出新聞」第12820号	2面	1922(T.11).11.27
73	上川 豊	癩ノ大楓子油新製剤治療 * 第六回日本医学会第十二分科会演説の追加	「鎮西医報」第197号	1-3	1922(T.11)-12
74	アーサー・エル・ディーン	癩病治療薬大楓子油に就て * 1922.11.9、京都帝国大学医学部での講演記録	「京都医学雑誌」第19巻第12号	35-39	1922(T.11)-12
75	加来 天民	大楓子油及び大楓子油脂肪酸「エチルエステル」の製法に就て	「日本之医界」第12巻第47号	1341-1343	1922(T.11).12.9